

研究ノート

## 高齢者向け生きがい感スケールの因子構造とその得点の検討

The Factor Structure of 'Scale for the Feeling that Life is Worth Living among the Aged' and Its Scores of the Elderly living at Home

青木 邦男  
Kunio AOKI

### I. はじめに

少子高齢社会の進展に伴って、高齢者が「第二の現役世代」や「プロダクティブ・エイジング」として、培ってきた経験や能力等を自らの健康や体力の状況に応じた形で地域社会への貢献や生産労働の担い手として活かすことが期待されている。同時に、高齢者が衰退する機能や離脱・喪失していく役割等に適応しつつ、自己実現や生きがいを追求するライフスタイルの形成が求められる。

ところで、老年社会学や老年心理学において、高齢者の主観的幸福感やQOLの実態およびそれらの規定・関連要因を明らかにする研究が精力的に累積されてきた。そうした研究の結果、主観的幸福感に有意に影響する要因として健康度と社会経済的地位、そして家族（配偶者と子どもの有無）の3つが共通して見出されている（古谷野・安藤、2003）。したがって、これら影響要因に働きかけることが高齢者の主観的幸福感を高めるとして、行政施策や介入が行われている。特に、健康度を高めることは政策としての医療費削減に貢献すると共に、高齢者の様々な活動の促進やQOLの向上に大きく寄与するために、各市町村で健康・体力増進のためのプログラムやサービスが精力的に実施されている。

ただ、「国民衛生の動向」（財厚生統計協会、2007）によれば、65歳以上の有訴者（病気やけがなどで自覚症状のある者）は男性で46.1%、女性で51.7%であり、85歳以上の有訴者は男性で

53.8%、女性で52.5%である。また、健康上の問題で日常生活への影響がある者の人口千人に対する割合は65歳以上で246.1、70歳以上で281.4である。高齢者は加齢と共に有訴者が増え、健康上の問題で日常生活への影響がある者が確実に増えると言える。したがって、健康度を高めて健康寿命を延ばす努力は十全になされなくてはならないが、一病息災としての健康や体力に適応していくことも重要であると言えよう。

一方、高齢者の生きがいについては、サクセスフル・エイジングにとって極めて重要であることが指摘され、生きがいに関する理論や実証的研究が蓄積されている（藤本ほか、2004；野村・2005；山本、2008；ほか）。例えば、(財)シニア開発機構による一連の生きがいに関する調査（(財)シニアプラン開発機構、1992、1997）によれば、加齢に伴って生きがいがある人は増加し、年金生活者では85%、その配偶者では82%が生きがいを持っている。また、その内容は“生きる喜びや満足”“生活の活力やはりあい”“心の安らぎや気晴らし”等が主な生きがいであることが報告されている。したがって、生きがいは健康や体力が衰えても、サクセスフル・エイジングを規定する重要な要因であると言えよう。特に、一病息災として慢性疾患や障害等と上手く折り合いをつけながら、高いQOLを求めるためには生きがいを持ち続ける生活が重要であると言える。しかしながら、近藤・鎌田（2003）が指摘しているように、これまでの我が国における多くの生きがい研究におい

て、生きがいを測る尺度は主にアメリカで作成された尺度を翻訳して使用しており、文化・社会的環境が異なる我が国での妥当性や信頼性は必ずしも明確ではない。したがって、我が国の高齢者の生きがい感や関連・規定要因等を明らかにするためには、我が国の高齢者に対応した生きがい感尺度を用いて、実証的研究を行う必要があることが指摘されている。

そこで、本研究は近藤・鎌田(2003)が我が国での高齢者を対象に作成し、その妥当性と信頼性を確認している「高齢者向け生きがい感スケール(K-1式)」の妥当性を再検証すると共に、性別及び年齢層別の生きがい感の現状を明らかにすることを目的に調査研究を実施したので報告する。

## II. 方法

### 1. 調査対象と調査方法

山口県の県庁所在地である山口市および自然豊かで地域コミュニティーが他市よりも比較的に存在である萩市の在宅高齢者を調査対象母集団とした。二市の選挙管理委員会名簿より、65歳以上の高齢者を無作為抽出によってそれぞれ1,200人の計2,400人を抽出し、郵送法による質問紙調査を実施した。質問紙の郵送後に督促のハガキを一度送付して、回収率を高めるようにした。その結果、調査対象者の62.1%にあたる1,491人の回答を得た。回収した調査票の内、欠損値のあるものを除いた1,293人(男性712人、女性581人)を分析対象者とした。分析対象者の平均年齢および標準偏差は男性で75.2(±6.2)歳、女性で75.8(±6.6)歳である。他の基本的属性を表1に示す。

### 2. 調査期間

山口市の高齢者については2007年2月から3月の間、萩市の高齢者については2008年5月から6月の間である。

### 3. 調査内容と点数化

質問紙の内容は基本的属性、生きがい感スケールおよび生きがい感を規定・関連すると推察され

る項目によって構成されている。本研究では生きがい感スケールの妥当性および性別、年齢層別の生きがい感の現状を明らかにすることを目的としているので、本研究で分析に取り上げた基本的属性と生きがい感スケールについて、具体的内容と点数化を以下に示す。

1) 基本的属性：年齢、性、配偶者の有無、家族形態、仕事の有無、暮らしぶり、健康状態等の項目を調べた。それぞれの質問項目の選択肢を表1. 分析対象者の基本的属性に示すとおりである。

2) 生きがい感：近藤・鎌田(2003)によって、我が国の高齢者を対象にして作成された「高齢者向け生きがい感スケール(K-1式)」を使用した。高齢者向け生きがい感スケール(K-1式)(以下、生きがい感スケールと略)は4構成因子(①「自己実現と意欲」因子、②「生活充実感」因子、③「生きる意欲」因子、④「存在感」因子)16質問項目より構成されており、その基準関連妥当性や概念的妥当性ならびに信頼性が確かめられている。各質問項目について、「1. はい(2点)」「2. どちらでもない(1点)」「3. いいえ(0点)」の3段階評定(逆転項目は点数が逆転)で回答を求め、点数化した。

### 4. 分析方法

生きがい感スケールについては主因子法によるプロマックス回転を用いて、因子分析を実施した。構成因子数は元の生きがい感スケールの4構成因子に基づき、4因子として分析を行った。また、各因子を構成する質問項目についてはクロンバック(Cronbach)の $\alpha$ によって信頼性を算出した。性別および年齢層別の生きがい感尺度の得点差については、性別×年齢層別(2×5)の2元配置の分散分析と多重比較を行った。年齢層は65歳～69歳、70～74歳、75～79歳、80～84歳、85歳～の5層に分けた。統計ソフトはSPSS 13.0J windows版を使用し、有意水準は5%未満とした。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 生きがい感スケールの因子構造

近藤・鎌田（2003）が我が国の高齢者を対象にして作成した「生きがい感スケール」を本調査対

象者に用いて調査し、その回答結果を主因法によるプロマックス回転を用いて、因子分析を行った。その結果を表2に示す。

生きがい感スケールの16質問項目のうち、“今

表1 分析対象者の基本的属性

項目	カテゴリー	男性	女性
1. 性		712 (55.1)	581 (44.9)
2. 年齢 (平均値±標準偏差)		75.2±6.2	75.8±6.6
3. 配偶者の有無	1. 健在	638 (89.6)	307 (52.8)
	2. 離別	10 ( 1.4)	18 ( 3.1)
	3. 死別	59 ( 8.3)	245 (42.2)
	4. 未婚	5 ( 0.7)	11 ( 1.9)
4. 家族形態	1. 既婚の息子家族と同居	97 (13.6)	125 (21.5)
	2. 既婚の娘家族と同居	25 ( 3.5)	43 ( 7.4)
	3. 未婚の子と同居	92 (12.9)	66 (11.4)
	4. 孫のみと同居	3 ( 0.4)	4 ( 0.7)
	5. 夫婦のみ	395 (55.5)	197 (33.9)
	6. 一人暮らし	49 ( 6.9)	113 (19.4)
	7. その他	51 ( 7.2)	33 ( 5.7)
5. 仕事の有無	1. 定職をもっている	161 (22.6)	62 (10.7)
	2. ときどき仕事をしている	150 (21.1)	72 (12.4)
	3. していない	401 (56.3)	447 (76.9)
6. 暮らしぶり	1. かなり恵まれた生活	40 ( 5.6)	40 ( 6.9)
	2. 暮らしに必要な物を買える	234 (32.9)	189 (32.5)
	3. 食べるのに困らない程度	378 (53.1)	281 (48.4)
	4. 食べるのに精一杯	47 ( 6.6)	65 (11.1)
	5. 非常に苦しい	13 ( 1.8)	6 ( 1.0)
7. 健康状態	1. 非常に健康である	15 ( 2.1)	10 ( 1.7)
	2. 健康である	117 (24.8)	120 (20.7)
	3. あまり健康と言えないが病気でない	346 (48.7)	291 (50.0)
	4. 病気がちで、寝込むことがある	143 (20.1)	137 (23.6)
	5. 病気で、一日中寝込んでいる	31 ( 4.3)	23 ( 1.8)

n (%)

表2 生きがい感尺度の因子分析結果 (プロマックス法)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	<Cronbachの $\alpha$ >
第1因子：【生活充実感】					< $\alpha$ =.706>
9. 何のために生きているのかわからないと思うことがある (R)	.722				
4. 何もかもむなしと思うことがある (R)	.696				
12. 今日は何をして過ごそうかと困ることがある (R)	.611				
2. 毎日をなんとなく惰性で過ごしている (R)	.393				
第2因子：【存在感】					< $\alpha$ =.772>
16. 私は家族や他人から期待され、頼りにされている		.841			
7. 私がいなければだめだと思うことがある		.603			
10. 私は世の中や家族のためになることをしていると思う		.508			
第3因子：【自己実現と意欲】					< $\alpha$ =.739>
6. 自分が向上したと思えることがある			.658		
15. 何かをなしとげたと思えることがある			.612		
14. 他人から認められ評価されたと思えることがある			.565		
5. 私にはまだやりたいことがある			.451		
第4因子：【生きる意欲】					< $\alpha$ =.605>
11. 世の中がどうなっていくのか、もっと見てみたいと思う				.607	
13. まだ死ぬわけにはいかないとと思っている				.614	
	寄与率 (%)	33.80	7.06	3.33	2.97
	累積寄与率 (%)	33.80	40.86	44.19	47.16

(R) は逆転項目

の生活に張り合いを感じている”“私には家庭の内または外で役割がある”“私には心のよりどころ、励みとするものがある”の3質問項目は4構成因子のいずれに対しても、因子負荷量が0.3以下であったので、削除した。3質問項目を除いた13質問項目を主因法によるプロマックス回転を用いて因子分析した結果、4因子構造に収束した。

第1因子は“何のために生きているのかわからないことがある”“何もかもむなしと思うことがある”“今日は何をして過ごそうかと困ることがある”などから構成されており、元の生きがい感スケールの構成因子である「生活充実感」の5構成質問項目の内、“今の生活に張り合いを感じている”を除いた4質問項目と同じものであるので、同様に「生活充実感」と名付けることにした。第2因子は“私は家族や他人から期待され、頼りにされている”“私がいなければだめだと思うこと

がある”などから構成されており、元の生きがい感スケールの構成因子である「存在感」の構成質問項目と全く同じであるので、同様に「存在感」と名付けた。第3因子は“自分が向上したと思えることがある”“何かをなしとげたと思えることがある”“他人から認められ評価されたと思えることがある”などから構成されており、元の生きがい感スケールの構成因子である「自己実現と意欲」の6構成質問項目の内、“私には家庭の内または外で役割がある”“私には心のよりどころ、励みとするものがある”を除いた4質問項目と同じものであるので、同様に「自己実現と意欲」と名付けた。第4因子は“世の中がどうなっていくのか、もっと見てみたいと思う”“まだ死ぬわけにはいかないとと思っている”から構成されており、元の生きがい感スケールの構成因子である「生きる意欲」の構成質問項目と全く同じであるので、

同様に「生きる意欲」と名付けた。

したがって、元の生きがい感スケールの16質問項目4因子構造は3質問項目の除いた13質問項目4因子構造に収束した（以下、この13質問項目を「生きがい感尺度」とする）。また、元の生きがい感スケールの因子は第1因子「自己実現と意欲」、第2因子「生活充実感」、第3因子「生きる意欲」そして第4因子「存在感」であったが、本生きがい感尺度では第1因子「生活充実感」、第2因子「存在感」、第3因子「自己実現と意欲」そして第4因子「生きる意欲」であった。

次に、生きがい感尺度の4因子の信頼性係数

( $\alpha$ ) は第1因子「生活充実感」で  $\alpha=0.706$ 、第2因子「存在感」で  $\alpha=0.772$ 、第3因子「自己実現と意欲」で  $\alpha=0.739$ 、そして第4因子「生きる意味」で  $\alpha=0.605$  であった。

## 2. 生きがい感尺度の構成因子別における性別、年齢層別の得点

本調査対象者を用いて修正した「生きがい感尺度」の4構成因子について、性別×年齢層別（2×5）の2元配置の分散分析によって、その因子別得点を比較した。その結果を表3に示す。

生活充実感については年齢層に主効果

表3 生きがい感尺度因子別の性別および年齢層別の得点

因子名	65～69歳 (n=241)	70～74歳 (n=398)	75～79歳 (n=342)	80～84歳 (n=204)	85歳～ (n=108)	F検定結果 (性別×年齢層別)	
1. 生活充実感	男性	5.57 (±2.19)	5.99 (±1.99)	5.65 (±2.02)	5.33 (±1.91)	5.00 (±2.35)	性別：F=0.604, n.s. 年齢層別：F=7.453, p<0.001 65～69>85～, 70～74>80～ 84, 85～75～79>85～, 性別×年齢層別：F=0.320, n.s.
	女性	5.94 (±2.21)	6.17 (±2.09)	5.69 (±2.17)	5.35 (±2.19)	4.93 (±2.21)	
2. 存在感	男性	4.39 (±1.64)	4.78 (±1.39)	4.54 (±1.50)	4.55 (±1.71)	4.30 (±1.71)	性別：F=1.185, n.s. 年齢層別：F=8.170, p<0.001 65～69>85～, 70～74>80～ 84, 85～75～79>85～, 80～ 84>85～ 性別×年齢層別：F=5.525, p<0.001
	女性	5.05 (±1.16)	4.73 (±1.75)	4.71 (±1.72)	4.17 (±1.79)	3.34 (±2.00)	
3. 自己実現 と意欲	男性	5.43 (±2.03)	5.59 (±1.87)	5.10 (±2.16)	5.00 (±2.22)	4.55 (±2.25)	性別：F=2.343, n.s. 年齢層別：F=12.209, p<0.001 65～69>80～84, 85～, 70～ 74>80～84, 85～, 75～79>85 ～80～84>85～ 性別×年齢層別：F=2.847, p<0.05
	女性	5.78 (±2.02)	5.30 (±2.14)	5.40 (±2.23)	4.60 (±2.45)	3.55 (±2.39)	
4. 生きる意欲	男性	3.26 (±1.02)	3.47 (±0.84)	3.38 (±0.89)	3.33 (±0.98)	3.18 (±1.21)	性別：F=12.284, p<0.001 男性>女性 年齢層別：F=7.987, p<0.001 65～69, 70～74, 75～79, 80～ 84>85～ 性別×年齢層別：F=3.208, p<0.05
	女性	3.32 (±0.92)	3.35 (±1.03)	3.34 (±1.01)	3.06 (±1.17)	2.44 (±1.34)	
生きがい感尺度 (総合点)	男性	18.63 (±5.32)	19.90 (±4.59)	18.65 (±5.12)	18.36 (±5.21)	17.11 (±5.81)	性別：F=1.908, n.s. 年齢層別：F=13.549, p<0.001 65～69>85～, 70～74>80～ 84, 85～, 75～79, 80～84>85～ 性別×年齢層別：F=3.731, p<0.01
	女性	20.12 (±4.63)	19.56 (±5.66)	19.21 (±5.62)	17.28 (±6.22)	14.06 (±6.18)	

注) 数字は平均値 (±標準偏差) n.s.は有意差なし

( $F=7.453$ ,  $p<0.001$ )が見られ、多重比較の結果、65～69歳、70～74歳、75～79歳が85歳～よりも有意に得点が高く、また70～74歳が80～84歳よりも有意に高い得点であった。次に、存在感については年齢層に主効果( $F=8.170$ ,  $p<0.001$ )が見られ、性別と年齢層の間に有意な交互作用( $F=5.525$ ,  $p<0.001$ )が見出された。年齢層の多重比較の結果、65～69歳、70～74歳、75～79歳、80～84歳が85歳～よりも有意に得点が高く、また70～74歳が80～84歳よりも有意に高い得点であった。次に、自己実現と意欲については年齢層に主効果( $F=12.209$ ,  $p<0.001$ )が見られ、性別と年齢層の間に有意な交互作用( $F=2.847$ ,  $p<0.05$ )が見出された。年齢層の多重比較の結果、65～69歳、70～74歳、75～79歳、80～84歳が85歳～よりも有意に得点が高く、また65～69歳、70～74歳が80～84歳よりも有意に高い得点であった。

次に、生きる意欲については性別と年齢層に主効果( $F=12.284$ ,  $p<0.001$ ;  $F=7.987$ ,  $p<0.001$ )が見られ、性別と年齢層の間に有意な交互作用( $F=3.208$ ,  $p<0.05$ )が見出された。男性が女性よりも有意に得点が高かった。また、年齢層の多重比較の結果、65～69歳、70～74歳、75～79歳、80～84歳が85歳～よりも有意に得点が高かった。次に、生きがい感尺度の総合点では年齢層に主効果( $F=13.549$ ,  $p<0.001$ )が見られ、性別と年齢層の間に有意な交互作用( $F=3.731$ ,  $p<0.01$ )が見出された。年齢層の多重比較の結果、65～69歳、70～74歳、75～79歳、80～84歳が85歳～よりも有意に得点が高く、また70～74歳が80～84歳よりも有意に高い得点であった。

#### IV. 考察

##### 1. 生きがい感スケールの因子構造について

近藤・鎌田(2003)が我が国の高齢者を対象にして作成した「生きがい感スケール」の4構成因子16質問項目は、本調査対象者に対する同スケールの調査結果を因子分析した結果、4構成因子13質問項目に収束した。13質問項目の因子構造は第

1因子「生活充実感」、第2因子「存在感」、第3因子「自己実現と意欲」そして第4因子「生きる意欲」で、近藤・鎌田が作成した「生きがい感スケール」の4因子構造と因子の順番は異なるが同様であった。したがって、近藤・鎌田が作成した「生きがい感スケール」の因子構造は異なる文化・社会的・自然環境等に在住する高齢者にも適応可能な汎用性のあるものと言えよう。ただ、各因子を構成する質問項目についてはその信頼性係数(クロンバックの $\alpha$ )が0.605～0.772であり必ずしも高くない。特に、「生きる意欲」因子は構成質問項目が2項目で、信頼性係数(クロンバック)  $\alpha$ が0.605であり、質問項目を3つ以上にして内的一貫性を高めるように改良することが必要であろう。

##### 2. 生きがい感尺度の構成因子別における性別、年齢層別の得点について

「生きがい感尺度」の4構成因子について、因子別得点と総合点を性別×年齢層別(2×5)の2元配置の分散分析によって分析した。その結果、すべての因子において85歳以上が65～84歳よりも低い得点であった。また、生活充実感と存在感においては70～74歳が80歳以上よりも高い得点を示した。また、生きる意欲では男性が女性よりも有意に高い得点であった。一方、総合点では、性差は見出されなかったが、85歳以上が65～84歳よりも低い得点であり、70～74歳が80歳以上よりも高い得点を示した。

近藤・鎌田(2003)は大阪府下老人大学受講者と老人福祉センター高齢者に対して生きがい感スケールを用いて調査を行い、72歳以下と73歳以上の2群に分けて比較を行っている。それによれば、性差や年齢差に有意差は見出されていない。本研究では84歳以下と85歳以上で有意な差が見出され、また70～74歳と80歳以上で有意差が見出された。総務庁による「高齢者の健康に関する意識調査」(エイジング総合研究センター、1998)では“生きがいに関する現在の意識”の質問に、生きがいを感じている人が65～69歳で78.5%、70

～74歳で76.8%、75歳～79歳で74.5%、そして80歳以上で68.7%であることが報告されている。この報告では65歳以上の高齢者の生きがい意識は加齢とともに低下している。この調査報告は単一質問項目に対する回答であり、そのまま本調査研究の結果と比べることは慎重でなければならないが、こうした調査報告や本研究結果を総合すると、高齢者の生きがい感が高いが後期高齢になると生きがい感が低下する可能性を示唆していると言えよう。今後、本研究尺度を用いて、多様な文化・社会的環境下に在住する高齢者を代表する調査対象者を対象に、多様な年齢層の高齢者の生きがい感を測定し、年齢幅の広い高齢者の生きがい感の実態を理解する必要がある。正確な実態を把握することによって、妥当性のある関連・影響要因を明らかにでき、具体的に有用な施策や介入を展開することが可能になると言えよう。

## V. まとめ

在宅高齢者1,293人（男性712人、女性581人）を分析対象者として、生きがい感を調査し、生きがい感スケールの因子構造および生きがい感尺度得点の年齢層別と性別の得点について分析した結果、以下のことが明らかになった。

1) 近藤・鎌田の作成した生きがい感スケール16質問項目は“今の生活に張り合いを感じている”“私には家庭の内または外で役割がある”“私には心のよりどころ、励みとするものがある”の3質問項目を除いた13質問項目・4因子構造に収束した。4因子は近藤・鎌田の命名した因子名と同様で、第1因子「生活充実感」、第2因子「存在感」、第3因子「自己実現と意欲」そして第4因子「生きる意欲」であった。したがって、近藤・鎌田の作成した生きがい感スケールの因子構造は汎用性をもつと判断される。ただ、各因子を構成する質問項目については高い内の一貫性を確保するために、質問数を少なくとも3つ以上にすることが求められる。

2) 生きがい感尺度の4構成因子について、因子別得点と総合点を性別×年齢層別（2×5）の

2元配置の分散分析によって分析した結果、生活充実感、存在感、自己実現と意欲、そして生きる意欲のすべての因子で85歳以上が65～84歳よりも低い得点であった。また、生活充実感と存在感においては70～74歳が80歳以上よりも高い得点を示した。また、生きる意欲では男性が女性よりも有意に高い得点であった。一方、総合点では、性差は見出されなかったが、85歳以上が65～84歳よりも低い得点であり、70～74歳が80歳以上よりも高い得点を示した。したがって、生きがい感は後期高齢者になって、得点が低下してくる可能性が示唆された。

高齢者の加齢に伴う生きがい感の実態（変化）を的確に掌握するためには信頼性と妥当性を確認された「生きがい感尺度」を使用して、文化・社会的環境や生活条件の異なる多様な高齢者を対象に生きがい感を測定して、調査結果を累積することが求められる。今後の課題である。

## VI. 文献

- エイジング総合研究センター（1998）「高齢社会基礎資料年鑑'98・'99」中央法規、東京、366-367。
- 古谷野 亘・安藤孝編著（2003）「新社会老年学」ワールドプランニング、東京、141-151。
- 近藤 勉・鎌田次郎（2003）「高齢者向け生きがい感スケール（K-1式）の作成および生きがい感の定義」『社会福祉学』43-2、93-101。
- （財）厚生統計協会（2007）「国民衛生の動向」『厚生指標』54-9、71-72。
- （財）シニアプラン開発機構（1992）「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査—サラリーマンシニアを中心として—報告書」。
- （財）シニアプラン開発機構（1997）「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査—サラリーマンシニアを中心として—第2回報告書」。
- 野村千文（2005）「「高齢者の生きがい」の概念分析」『日本看護科学誌』25-3、61-66。
- 長谷川明弘・藤原佳典・星 且二ほか（2003）「高齢者における「生きがい」の地域差：家族構成、身体状況ならびに生活機能との関連」『日本老

年医学雑誌』40-2, 390-396.

藤本弘一郎・岡田克俊・泉 俊男ほか (2004) 「地域在宅高齢者の生きがいを規定する要因についての研究」『厚生指標』51-4, 24-32.

山本思外里 (2008) 「老年学に学ぶ」角川学術出版, 東京, 117-158.

## Abstract

**The Factor Structure of ‘Scale for the Feeling that Life is Worth Living among the Aged’ and Its Scores of the Elderly living at Home**

**Kunio AOKI**

The purpose of this study was to examine the factor structure of ‘Scale for the feeling that life is worth living among the aged’ and its scores of the elderly living at Home. The data were obtained through questionnaire distributed to 1,293 (712 men, 581 women) old people living at home. Factor analysis using promax method and analysis of variance using two-way layout (sex × age group) were applied to the data.

Main findings were as follows:

(1) ‘Scale for the feeling that life is worth living among the aged’ composed by 16 items was similar four factors after having got rid of three items. The factor structure was first factor: “Life sense of Fulfilment”, second factor: “Existence sense”, third factor: “Self-realization and will” and fourth factor: “Will to live”.

(2) The results of ANOVA showed that age groups of less than 84 year old had significantly higher scores than age group of more than 85 year old in total score. And, age group of 70-74 year old had significantly higher scores than age group of 80-84 year old in total score.